

原 著

認知症のある人の活動の質を高める要因の検討

Factors that Improve the Quality of Activities for People with Dementia

白井 はる奈

SHIRAI Haruna

小川 真寛

OGAWA Masahiro

西田 征治

NISHIDA Seiji

抄 録

認知症のある人が、活動を通してよい状態が得られるように、援助者はどのような介入を行えばいいのかを明らかにすべく、活動の質 (Quality of Activities : QOA) を左右する要因を質的に分析した。作業療法士が活動の質評価法 (A-QOA) を用いてクライアントの活動場면을観察により評価し、活動の質を高める要因と低める要因を分析したところ、【活動選択で配慮すること】、【環境面で配慮すること】、【活動開始時に配慮すること】、【活動中に配慮すること】、【活動後に配慮すること】の5つの4次カテゴリが抽出された。下位カテゴリで得られた「クライアントの心身機能に合った活動を選択する」、「クライアントが失敗しないような手掛かりを提供する」、「集中でき、快適で安心できる環境にする」などは、学生や新人作業療法士が認知症のある人に介入する際の具体的なガイドの原案になると考える。

キーワード ■ 認知症, 活動の質, QOA

はじめに

作業療法士は、クライアントの意味のある活動を同定するために、認知機能に障害がなければ COPM (カナダ作業遂行測定)¹⁾ を用いて面接を行い、また作業療法の効果を評価するために COPM で本人の主観的な満足度や遂行度を評定することができる。しかし、認知症が進

行し、自らの意思を言語的に表出することが難しい場合、その人にとっての重要な活動や満足度を聴取することが困難になる。その人にとって意味ある活動を選んでいるか、その人が活動を通してよい状態が得られているかを評価することが、より良いケアにつながり、より良い生活を送ることにつながるが、それらの視点で活動の質（Quality of Activities：以下 QOA とする）を評価できる指標はこれまでなかった。事例研究においても、介入の効果を「〇〇を行うと笑顔が増えた」「発語が増えた」など、よい状態であることを示したものは散見される²⁻⁴⁾が、量的な指標で表現できないことが、活動の質を評価する上での課題であった。なお、活動の質とは、「活動と対象者との結びつきの強さ」のことであり、活動の遂行や、言語表出・感情表出や社会交流を生む状態や、活動の結果から得られる対象者への影響から判断される概念と定義をした⁵⁾。

筆者らは、QOA を数値化できることが認知症ケアに重要な視点となり、認知症のある方の支援に有用と考え、観察により活動から引き出される本人への効果を調べられる、活動の質評価法（Assessment of Quality of Activities：以下 A-QOA とする）を開発してきた^{5,6)}。A-QOA は 25 項目（表 1）からなり、各項目が 4 段階（4. 非常に強く / 例外的に観察される, 3. 観察される, 2. 観察されるがその程度が限定的 / 疑問, 1. 観察されない）で評定され、点数が高い方が活動の質が高いと判断される。最低点が 25 点, 最高点が 100 点である。この評価は様々な活動を認知症のある方に導入した際に、活動の選択や効果検証のためのより客観的な根拠となると考える。なお、A-QOA の項目はその後の研究により整理し、2020 年 2 月からは 21 項目となっている。

本研究の目的は、QOA を高めるためのプラクティスガイドを開発するために、QOA を高める要因について分析することである。認知症高齢者に活動を提供するための、アクティビティの参考になる書籍は散見されるが、具体的にどのように選択し、導入すればよいのかについて書かれた書籍はあまり見られない。本研究により、実際の QOA の点数を参考に、QOA を高めた、低めた原因を分析することで、エビデンスに基づいたプラクティスガイドを開発するための一助となると考える。なお、本研究は佛教大学の人を対象とする研究倫理審査の承認を得て行った（承認番号：H30-6-B）。

方法

1) データ収集方法

2018 年 9 月に、病院や施設で認知症高齢者を対象として勤務している 19 名の作業療法士を対象に、A-QOA の採点方法を習得するための研修会を開催し、研究協力者として、臨床での A-QOA データの提供を依頼した。研究協力者、所属施設、クライアントには書面にて研究目的や方法を説明し、同意を得た上で行った。

表 1. A-QOA の評価項目と採点基準

活動の遂行
1. 活動の参加を妨げる状態がない 2. 活動の準備をする 3. 活動を開始する 4. 活動の対象に視線を向ける 5. 活動の対象に体を位置づける 6. 活動を継続する 7. 活動に集中する 8. 活動にかかわる知識や技術を示す 9. 活動中に内容を選択する / 好みを示す 10. 活動が円滑に進むように工夫する
活動の結果
11. 活動後ネガティブな感情表出がない 12. 活動の結果として満足感を得る 13. 有能感を得る 14. 次の活動への意欲を示す
活動時の感情表出
15. ネガティブな感情表出がない 16. 笑顔が見られる 17. 高揚する
他者とのかかわり
18. 活動を通して交流する 19. 一緒に協調して活動する 20. 活動に関係した知識・技術を教える 21. 他者に意思を伝える 22. 他者を思いやる 23. 活動から喚起される感情を他者と共有する
言語表出
24. 発語の流暢さがある 25. 回想する
採点基準
4点：非常に強く / 例外的に観察される 3点：観察される 2点：観察されるがその程度が限定的 / 疑問 1点：観察されない
※各1～4点 合計25～100点（点数が高いほど質の高い活動ができている）

研究協力者（作業療法士）1名に対し、10名の認知症高齢者の2場面の活動の様子をA-QOAで評価してもらった。研究協力者には、クライアントの診断名、認知症の重症度（FAST）、活動名、A-QOA素点と、QOAを高めた、または低めたと考える要因を自由記述で記入してもらった。

2) データ分析方法

自由記述に書かれている内容を、意味ごとに分節化し、データのスライスを作成し、1枚の付箋に1つのスライスを転記し、1枚のラベルとした。類似した意味を持つラベルを模造紙上に統合・集約し、カテゴリ化を行った。最終的に集約できなくなるまで階層を作りカテゴリ化を繰り返した。これらの分析は、質的研究経験のある著者3名で行った。

結果

18名の研究協力者からクライアント132名、263場面のデータを得ることができた。

132名のクライアントのFASTは、7が5%、6が42%、5が28%、4が20%、3と2が各々3%であった。活動内容は、ADL練習、折り紙、書道、将棋、歌の会、風船バレー、集団体操、回想法、散歩、園芸など多岐にわたり、クライアントとOTとのマンツーマンの個別活動から、集団人数が50名の集団活動まで、集団の規模も様々であった。263場面のうち、QOAを高めた、または低めたと考える要因の自由記述が記されていたのは227場面であった。

A-QOAの点数が一番低かったのは、FAST7の87歳の女性がOTとマンツーマンで風船バレーを行った場面であり、28点であった。自由記述欄には「BPSDを認め、活動に興味は示さず険しい表情。周囲に注意を向け、暴言が目立つ状況であった。」と書かれていた。自由記述が書かれている場面のうち、A-QOAの点数が一番高かったのは、FAST5の85歳の女性がOTとマンツーマンで裁縫を行った場面であり、86点であった。自由記述欄には「職業として裁縫を行っていた、裁縫の知識がある、デいの裁縫道具になれている」と書かれていた。263場面のA-QOAの平均点は58点であった。

227場面のQOAを高めた、または低めたと考える要因の自由記述から得られたデータのラベルは430枚であった。ラベルをカテゴリ化した結果、4次カテゴリが抽出された。

4次カテゴリは、①【活動選択で配慮すること】、②【環境面で配慮すること】、③【活動開始時に配慮すること】、④【活動中に配慮すること】、⑤【活動後に配慮すること】の5つにまとめられた。なお、文中の【 】内は4次カテゴリ、「 」内は3次カテゴリ、『 』内は2次カテゴリ、〈 〉内は1次カテゴリの名称を示している。

図1に4次・3次カテゴリの関連図、表2～6に1次から3次カテゴリの内容を示した。1次カテゴリの文章の前の×印は、QOAが低くなった要因を示している。3次カテゴリの名称は、援助者が認知症のある人と活動を行う際の参考になるように、援助者を主語にした名称とした。以下、4次カテゴリ毎に、代表的な下位カテゴリ例を挙げて結果を述べる。カテゴリ名において、クライアントはCLと表記した。

①【活動選択で配慮すること】の下位カテゴリは「CLの心身機能に合った活動を選択する」、「CLに合わせて作業の構造を選択する」「CLが関心のある活動を選択する」「好きな活動」「得意な活動」「貢献感の持てる活動」などから構成されており、クライアントの機能に合っていない活動を行うことで、クライアントは活動にコミットすることができず、活動の質が低くなっていた。また、クライアントが好きな活動や関心のある活動を行うことで、活動の質が高くなっていた。

②【環境面で配慮すること】の下位カテゴリは、「集中でき、快適で安心できる環境にする」

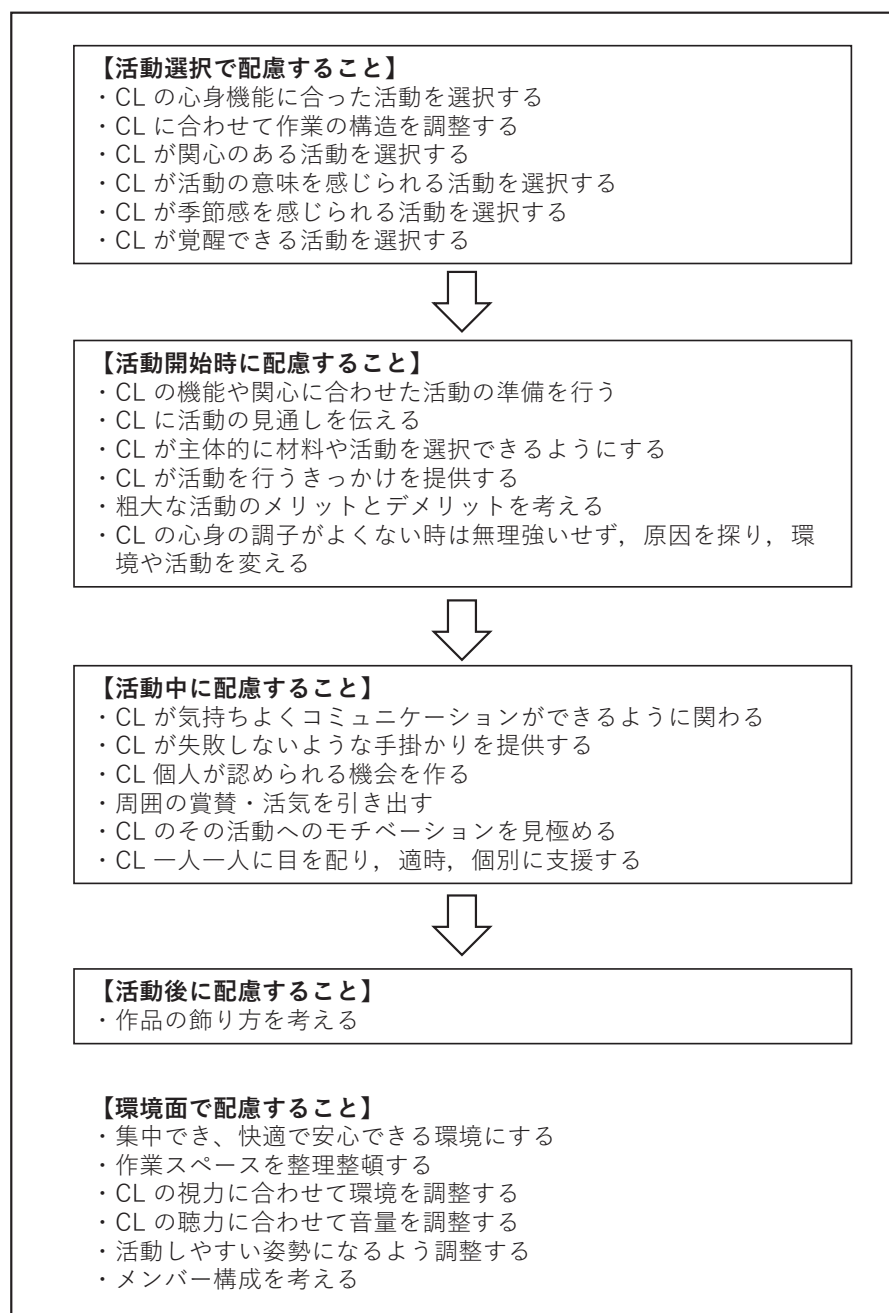


図1. 4次・3次カテゴリーの関連図

「作業スペースを整理整頓する」「活動しやすい姿勢になるよう調整する」「メンバー構成を考える」などから構成された。〈周囲の騒音〉や〈余計な聴覚刺激〉で活動に集中することができず、活動の質が低くなっていた。〈なじみの他CL〉がいることで安心して活動に参加することができ、『スタッフがきちんとフォローできるメンバー数』で活動を行うことで、活動の質が高くなっていた。

③【活動開始時に配慮すること】の下位カテゴリーは、「CLの機能や関心に合わせた活動の準備を行う」「CLが主体的に材料や活動を選択できるようにする」「CLの心身の調子がよく

表 2. QOA に影響を与える要因カテゴリ①【活動選択で配慮すること】

1次カテゴリ	2次カテゴリ	3次カテゴリ	
× 課題が難しすぎる	課題の難易度が合っている	CLの心身機能に合った活動を選択する	
× 簡単すぎる			
難易度がちょうどよい	活動はCLの身体機能に合っている		
身体機能に関わらずできる (=本人に合っている)			
× CLの身体機能に合っていない			
× CLの視力に合っていない			
× CLの聴力に合っていない			
CLの認知面に合った作業	活動はCLの認知機能に合っている		
× 失語がある（のに言語的な活動）			
活動の順序を考える	CLの気持ちを考えた活動の順序になっている	CLに合わせて作業の構造を調整する	
作業の手順が決まっている	作業の構造が適切		
枠組みが決まっている			
× 選択肢がない			
工程が少ない			
× 自由度が高すぎる			
× 選択肢が少ない × 自由度が少ない			
その活動が好き	好きな活動		CLが関心のある活動を選択する
好きなことに類似した活動			
好きなことに関係した活動			
嫌いではない			
× 好きな活動ではない			
本人の好きな何か（要素）が活動にある	得意な活動		
得意な作業			
× 苦手な作業 × 慣れ過ぎた活動			
馴染みのある作業	慣れた活動		
過去に行ったことがある			
趣味			
普段から行っている			
慣れた活動			
× 慣れていない活動			
職歴と活動がマッチ	興味のある活動		
× 興味がない			
興味があった			
やったことがある			
初めて行う作業で発見があった			
× やりたい作業ではない × 初めての活動			
思い出のある活動	思い出のある活動	CLが活動の意味を感じられる活動を選択する	
活動の意味を伝える（家族のため）	貢献感を持てる活動		
プレゼントしようという気持ちを引き出す			
誰かの役に立つ（貢献感）			
役割	役割を感じられる		
日課	良い習慣であると感じている		
身体の回復を感じられる活動	活動が役立っていると感じられる		
活動の動機付け（手の運動）			
× 必要性を感じない	CLは必要性を感じている		
季節感を味わう	季節感を感じられる	CLが季節感を感じられる活動を選択する	
ダイナミックな活動で覚醒	覚醒している	CLが覚醒できる活動を選択する	
屋外で覚醒			

表3. QOAに影響を与える要因カテゴリ②【環境面で配慮すること】

1次カテゴリ	2次カテゴリ	3次カテゴリ
× 周囲に人が多い	集中できる環境にする	集中でき、快適で安心できる環境にする
× 周囲の騒音		
× 余計な視覚刺激		
落ち着ける部屋		
× 寒い	快適な温度にする	
× 部屋が暗い	適切な明るさにする	
慣れた環境	慣れた環境で活動を行う	
× 作業環境が狭い	机の上を整理する	作業スペースを整理整頓する
× 机上に道具が多く出ている		
良く見える位置	CLの視力に合わせて環境を調整する	CLの視力に合わせて環境を調整する
× 音が小さい	CLの聴力に合わせて音量を調整する	CLの聴力に合わせて音量を調整する
音量が適切		
活動しやすい環境（姿勢）であった	活動しやすい姿勢になるよう調整する（机・椅子の高さ）	活動しやすい姿勢になるよう調整する
周囲と同じ活動	同じ場でやる人の活動について考える	メンバー構成を考える
× なじみでない他 CL	なじみの他者がいて安心できる環境にする	
なじみの他 CL		
家族も参加		
信頼する人との活動		
年代を考慮	ともに活動を行う他者の年代を考慮する	
× グループ活動を共に行う人とのトラブル	グループ活動でメンバーの特性を把握し配席を考える	
少人数グループ	スタッフがきちんとフォローできるメンバー数にする	

ない時は無理強いせず、原因を探り、環境や活動を変える」などから構成され、誘導時から不安が強い時、拒否がある時、不穏な時はその後の活動においても活動の質が低くなっていた。また、〈モチベーションの高まる見本〉を準備したり、『使いやすい道具を準備』することで、活動の質が高まっており、音楽を用いた活動では『CLの好きな曲、なじみのある曲を選択する』ことで活動の質が高くなっていた。

④【活動中に配慮すること】の下位カテゴリは、「CLが気持ちよくコミュニケーションができるように関わる」「CLが失敗しないような手掛かりを提供する」「CL一人一人に目を配り、適時、個別に支援する」などから構成された。グループ活動では、〈スタッフから個別の働きかけがない〉ことや、〈不穏、不安に対応しない〉こと、〈スタッフが近くにいないこと〉で活動の質が低くなっていた。また、〈適切なタイミングで介入する〉ことや、〈失敗しないようさりげない支援〉をすることで失敗を予防し、〈CLに教えてもらうように関わる〉こと、〈CLに相談しながら協働する〉こと、〈CLに肯定的なフィードバック〉を行い、「CL個人が認められる機会を作る」ことで活動の質が高くなっていた。

表 4. QOA に影響を与える要因カテゴリ③【活動開始時に配慮すること】

1 次カテゴリ	2 次カテゴリ	3 次カテゴリ
見本を準備	よい見本を準備する	CL の機能や関心に合わせた活動の準備を行う
モチベーションの高まる見本		
× 見本が悪い		
道具に慣れている	慣れた道具を準備する	
家族が準備してくれた道具を使う	意欲の上がる道具（材料）を準備する	
× 道具が良くない	使いやすい道具を準備する	
道具が揃っている		
× 道具が悪い		
× 作り方がわからない	手順書を準備する	
歌詞を準備	音楽を用いた活動では歌詞カードを準備する	
聴覚刺激	音楽を用いる	
知っている歌に誘発されて体が動く		
楽器を用意		
好きな歌	音楽を用いた活動では、CL の好きな曲，なじみのある曲を選択する	
なじみの曲		
懐かしい曲		
活動の見通しが立つ	これから行うことを CL が理解している	CL に活動の見通しを伝える
× 活動選択するが希望が通らない	CL が主体的に材料や活動を選択できる	CL が主体的に材料や活動を選択できるようにする
活動に選択肢がある		
選べるように活動を提示		
道具を持つことで手続き記憶が賦活される	CL が活動を行うきっかけを提供する	CL が活動を行うきっかけを提供する
OT が歌い始める		
× 若い時のように体が動かないという気持ち	粗大な活動は，過去の自分と比較し悲観的になりやすい	粗大な活動のメリットとデメリットを考える
風船バレーで BPSD が減少し，活動性が高まる	風船バレーは活動にコミットしやすい活動	
× 体調不良	活動開始前，開始時から「よい状態」ではない	CL の心身の調子がよくない時は無理強いせず，原因を探り，環境や活動を変える
× 不安が強い		
× 開始時から拒否		
× 関心低い		
× 覚醒が低い		
× 不穏		
× 昼食後で眠い		

表5. QOAに影響を与える要因カテゴリ④【活動中に配慮すること】

1次カテゴリ	2次カテゴリ	3次カテゴリ
回想を促す	回想を促す	CLが気持ちよくコミュニケーションができるように関わる
回想を促す視覚的な情報		
季節感のある活動で回想が促される		
コミュニケーションのきっかけ作り		
回想を引き出す関わり		
コミュニケーションの工夫	意思疎通の機会を作る	
スタッフと会話しながらADL練習		
家族の話題を出す		
他者の発言の補足や橋渡し		
関わりのきっかけがある		
動作のきっかけを作る	失敗しないように手掛かりを提供する	CLが失敗しないような手掛かりを提供する
× OTの説明・援助が少ない		
適切なタイミングで介入する		
工程順に説明		
適宜説明する		
声掛け		
失敗しないようさりげない支援		
賞賛される機会を作る	CL個人が認められる機会を作る	CL個人が認められる機会を作る
活躍の機会を提供（ファシリテート）		
× スタッフが無理強い		
CLに教えてもらうように関わる		
CLに依頼する		
CLに肯定的なフィードバック		
CLに感謝する		
CLに相談しながら協働する	周囲の賞賛・活気を引き出す	周囲の賞賛・活気を引き出す
意志選択を促す		
他CLからの賞賛		
周囲の良い反応		
盛り上げた		
競争心を駆り立てる	無理強いをしない	CLのその活動へのモチベーションを見極める
促されて参加するが受動的		
× スタッフからの個別の働きかけがない	一人一人に個別に働きかける	CL一人一人に目を配り、適時、個別に支援する
マンツーマン		
集団に参加できるような援助をする	援助者が介入し、グループ内の交流を促す	
× 交流を生むきっかけがない		
本人がしたい時に促す	タイミングを逃さない	
× スタッフが近くにいない	グループ活動であっても、援助者が近くで見守り、必要に応じてサポートする	
スタッフが良い位置		
× 不穏、不安に対応しない	一人一人に目配りし、CLの気持ちの変化を察知する	
スタッフに活動の知識、技術がある	活動の知識が必要	

表 6. QOA に影響を与える要因カテゴリ⑤【活動後に配慮すること】

1 次カテゴリ	2 次カテゴリ	3 次カテゴリ
満足感を感じる機会を作る	CL 本人が見ることができる場所に作品を飾る	作品の飾り方を考える
作品が会話のきっかけになった	他者に作品を見てもらう	
見栄えの良い完成品	作品を見栄えよく飾る	

⑤【活動後に配慮すること】の下位カテゴリは、『CL 本人が見ることができる場所に作品を飾る』こと、『他者に作品を見てもらう』こと、『作品を見栄えよく飾る』といったように「作品の飾り方を考える」ことで、活動の質が高くなっていた。

考察

CiNii の「大学の図書館を探す」⁷⁾において「認知症」「ケア」というキーワードで検索すると、647 件の書籍が抽出され、「認知症」「アクティビティ」では 8 件、「認知症」「活動」では 49 件、「認知症」「作業」では 33 件の書籍が抽出された。このように、認知症高齢者に活動を提供するための、アクティビティの参考になる書籍は多いが、具体的にどのように活動を選択し、具体的にどのように導入すればよいのかについて書かれた書籍はあまり見られない。

西田⁸⁾は、健康につながる作業を特定する方法として、①作業歴を参照する、②本人や家族に尋ねる、③日頃の言動を観察する、④提供してみる、を挙げ、作業遂行を促進する方法として、「必要に応じた適切な援助」、「安心する声掛けや賞賛をする」、「作業場を整える」、「作業の簡素化をする」などを挙げている。今回の研究結果と類似した点もあるが、本研究は実際の QOA の点数を参考に、QOA を高めた、低めた原因を分析して得られた結果であり、エビデンスに基づいた介入を行う上での参考になるといえる。また、本研究で得られた 1 次、2 次カテゴリは具体的であるため、実際の介入においてチェックリスト的に用いることができるかもしれない。

村田は、6 病院 25 人の作業療法士とその担当した高齢者 28 人に対する個別インタビューと観察に基づくデータを分析し、高齢者を対象とした作業療法士の 10 の戦略にまとめた⁹⁾。そこに挙げられている「作業が成功するように準備する」⁹⁾は、本研究で得られた「CL の機能や関心に合わせた活動の準備を行う」、「CL が失敗しないような手掛かりを提供する」、「CL 一人一人に目を配り、適時、個別に支援する」に通じる。これらは、作業療法士は、クライアントが成功体験の実感が得られるように介入することが大切であるという認識に基づいていると思われるが、どのように支援するべきかは、本研究で得られた 1 次、2 次カテゴリが参考になると思われる。また、「環境を落ち着いたものに調整する」⁹⁾は、本研究で得られた「集中でき、快適で安心できる環境にする」、「メンバー構成を考える」にも通じる。環境面で配慮すべきことは、クライアントの状態に応じて多々あると思われるが、快適に安心して活動を行うた

めに、本研究で得られた項目については最低限、意識的に調整しなければならないことである。環境因子は作業遂行に大きな影響を与え、精神面にも大きく影響するため、目の前のクライアントにとって最適な物理的環境、人的環境になっているかどうかをアセスメントし、調整することが大切である。

Gitlin ら¹⁰⁾ は活動を行うための環境設定として、適切な明るさを確保すること、気が散らないように不要なものを片づけること、テーブルや椅子を適切な高さに調節することなどを挙げている。本研究で得られた、『適切な明るさにする』、『活動しやすい姿勢になるよう調整する』なども通じる。今回の研究で得られた結果とともに、村田や Gitlin らの文献や、その他の文献に書かれている、認知症のある人がよい状態で活動を行うための工夫も加味し、プラクティスガイドを作成したいと考えている。

山根¹¹⁾ は、通常治療的に行なわれる小集団は4～5名人程度から12～13人程度がもっとも効果的である、通常はメンバー5～6名に対してスタッフが1名程度は必要になると述べている。本研究において、大集団のレクリエーションではクライアントが受身的な参加になり、スタッフの目が行き届いていない場合は、A-QOAの点数が低くなる傾向が見られた。自由記述においては、「オープンな場でのレクなので、途中で抜けて行ってしまう。フォローする職員がいないとそれきりになってしまう。」(90歳女性・FAST 5・30名でのレクリエーション・A-QOA 38点)、「マンツーマンの声掛けがないと、座っているだけの様子。レクに補助者が入っているかどうかで異なる。」(87歳女性・FAST 6・30名でのレクリエーション・A-QOA 48点)との記載が得られた。援助者は、様々なジレンマの中で大集団での活動を行っているのかもしれないが、一人ひとりの活動の質を高めるためにも、『スタッフがきちんとフォローできるメンバー数』で、『一人一人に目配りし、CLの気持ちの変化を察知すること』、『一人一人に働きかける』ことが必要である。

本研究では、臨床の作業療法士が経験で行ってきた暗黙知を形式知にするための整理ができたと考える。今回導き出された要因を、作業療法学生や新人作業療法士が、意識的に目の前のクライアントに適応して考えていくことで、そのクライアントの活動の質を高められると考える。今後データを増やし、理論的飽和に達しているかどうかを検証するとともに、認知症のタイプや重症度に応じた分析も行い、タイプや重症度に応じた活動の質を高める方法について吟味していきたい。また、プラクティスガイド案を作成し、認知症のある人と活動を行う援助者(作業療法士、介護士、家族介護者など)への介入研究を行い、ガイドの妥当性を検証していきたい。

謝辞

本研究はJSPS 科研費(課題番号:18K10527)の助成を受け実施した。本研究にご協力頂

いた研究協力者の作業療法士の方々，クライアントの方々に深謝いたします。

〔文 献〕

- 1) Mary Law, Sue Baptiste 他 4 名. 吉川ひろみ訳：COPM 第 4 版 カナダ作業遂行測定. 大学教育出版, 2014.
- 2) 林智子, 高田真麻：あなたの輝く笑顔が見たい～「認知症の人の声」を聴き，取り組んだ事例. 日本慢性期医療学会抄録集 (suppl): 642-642, 2018.
- 3) 佐藤万里子, 佐藤妙子, 他 1 名：重度認知症者へのカンフォータブル・ケアの有効性 若年性認知症者の事例を通しての一考察. 日本精神科看護学術集会誌 59 (2): 121-123, 2016.
- 4) 山下敏子：アルツハイマー型認知症患者の BPSD 軽減をめざした取り組み かかわりを通して見えた笑顔. 日本精神科看護学術集会誌 57 (1): 344-345, 2014.
- 5) 小川真寛, 白井はる奈, 他 1 名：活動の質評価法 (A-QOA) 開発の取り組み. 作業療法ジャーナル 54 (1): 88-91, 2020.
- 6) Ogawa Masahiro, Shirai Haruna, 他 2 名：Rasch Analysis of the Assessment of Quality of Activities(A-QOA), an Observational Tool for Clients With Dementia. American Journal of Occupational Therapy 75(1): 7501205040p1-7501205040p9, 2021.
DOI: 10.5014/ajot.2021.039917
- 7) CiNii 大学図書館の本を探す <https://ci.nii.ac.jp/books/> (2020 年 10 月 1 日アクセス)
- 8) 宮口英樹監修：改訂第 2 版認知症をもつ人への作業療法アプローチ視点・プロセス・理論一. メジカルビュー社, 2019.
- 9) 村田和香：“私らしさ”を支えるための高齢期作業療法 10 の戦略. 医学書院, 2017.
- 10) Laura N. Gitlin, Catherine Verrier Piersol. 西田征治, 小川真寛, 他 2 名訳：作業療法士がすすめる認知症ケアガイド 行動心理症状の理解と対応&活動の使い方. クリエイツかもがわ, 2020.
- 11) 山根寛：精神障害と作業療法 治る・治すから生きるへ 第 3 版. 三輪書店, 2010.

(しらい はるな 作業療法学科)

(おがわ まさひろ 神戸学院大学 総合リハビリテーション学部 作業療法学科)

(にしだ せいじ 県立広島大学 保健福祉学部 作業療法学科)

2020 年 10 月 5 日受理